

コマは回転しますが、いずれは止まりま
す。一方、歯車は自分の力では回りませ
んが、かみ合う他の歯車と共に回り続
けます。さらに、その力を次の歯車へ
受け渡します。

*

全国数カ所の都道府県倫理法人会では、
後継者の育成を一年かけて行なう、「後継者
倫理塾」が開催されています。年度ごと
に開塾し、十数名の塾生が諸先輩経営者
から倫理経営を学び、自身の人間性を磨
き、経営力を培います。塾生にとっては、
この塾の課程の修了が終着点ではなく、
その後からが本番となります。ある修
了生のエピソードを紹介します。

S氏は、祖父が創業し、現在は父が社
長となっている建設会社の専務です。大
手ゼネコンで働いた後、父の下へ就社。
待っていたのは、想像とは真逆の現実で
した。

会社では社長である父と常に衝突。家
に帰れば妻とは喧嘩が絶えず、S氏が企
画した流行りのデザインの住宅は、閑古鳥
が鳴いていました。どうにもならない中
で、父から「後継者倫理塾」への入塾を
勧められたS氏は、渋々入塾したのでした。

塾の講座では、心理テストがありました。
判定は「傲慢。わがまま。自己中心的」
でした。その結果にS氏は不満で一杯で
した。それを妻に告げると、「テストの結
果は、その通りだよ。わかっているのよ！」
と猛撃されたのです。ひどく嘆く妻の姿
を見て、S氏はこれまでの自分を顧みま
した。甘やかされて育った子供の気持ち
のままに、い

歯車のように 次へと力を受け渡す



つも嫌なことから逃げてきた自分がいま
いた。これではいけない」と反省したS
氏は、真摯に塾と向き合うようになった
のです。

塾に通う中で、理解できた父の言葉が
ありました。「俺たちは技術屋だ」と言
っていたことです。純粋倫理を学び、父
の仕事ぶりに目が向くようになった時、
「主役はお客様だったのだ」と気づき
ました。会社を訪れたお客様の幸せな思
いを形にすることが、自分たちの仕事
だと知ったのです。それまで、「儲かる
家を作るべきだ」と主張していたS氏。
父と衝突するのは当然でした。また、
企画が失敗した原因も、自分の考えの
浅はかさであることに気づいたのでした。

塾が修了した今、父への思いは反発から
尊敬へと変わりました。S氏が「後継
者倫理塾」を介し、父から受け取った
言葉があります。「創業者の思いを継
ぎ、人に感謝し、人へ奉仕する心こそ
が、経営の原点である」。現在S氏は、
「後継者倫理塾」の運営委員となり、
後輩の指導に力を注いでいます。

会社では専務としての自覚を深め、父
の右腕となって事業を遂行しています。
今では「父のように、一步一步堅実に、
経営の道を進んでいきます」と、力強く
述べるS氏です。

すっかりとかみ合った歯車が力強く回
転し、周りの歯車を動かすように、周囲
の人を巻き込み大きな働きをする、リ
ーダーとなりたいたいものです。そのた
めに必要なのは、自分という歯車の
原動力である「もと」に心を向けるこ
となのです。